



## 夜日本の伝説

夜ふかしの生活をしていると、意外に夜ふかしの他人が多いことに気がつく。最近はあまりそういう生活でもないけど、僕も以前かなり極端に夜型の生活をしていた。

あれはあれでももしろい。東京にいて、若くて、遊ぶのが好きな人は、たまにそういう生活サイクルに入ったりする。

もちろん太陽の下の生活は楽しい。気持ちがいい。先日友達たちの結婚式に行つて、太陽がパキッと照りつけていて、空はおそろしく青くて、富士山が物凄くでかくて、その風景の前に、首をかしげて立っている友達たちの後ろ姿を見ていたら、ボロボロと泣けてきてしまった。

その人たちの前に、その太陽の風景のように広げて、人生が始まる。二人で始める。

人が生きているうちに見る、一番眩しいものが太陽である、とはタケイグッドマンの言葉。

太陽はいい。

しかし月もまたいい。その結婚式から帰る道すがら、山あい的高速道路を一人で走っていたら、もう落っこちそうなくらいに大きな月が出ていて、そうか満月だ今日は、と思つて道端に車を停めて、うす藍い空をずっと見てしまった。ものすごい寒かった。

ちよつといい話はこのくらいで終わり。本当にいい話は、あまり書かないようにする。自分の心の中にとつておくべきものもある。

さて、月がまん丸く出る東京。そこに二人の若者がいて、まったくどうでもいい話をしている。ここ東京ではよくあること。

どんな話かというと、これだけ夜ふかしをしている人がいるのだから、これはこれで「夜の部」として認知して、夜型の生活サイクルに合うように、社会をつくれればいいんじゃないかという話。左官屋さんにも、銀行員にも、豆腐屋さんにも、いや僕はどうも夜の方が調子がよくて、という人がいるだ

ろうから、だいたい社会は成り立つんじゃないか、という話。

だから、普通の昼の日本社会に対して、十二時間差の「夜日本」がある訳である。

「夜日本」に所属する人は、夜七時くらいに起きて、夜八時くらいの電車に乗って学校や職場へ向かう。「昼日本」の方はその頃退社時間くらいだから、電車の上り下りでちょうど反対になって、混雑も緩和されるだろう。

「夜日本の大人」の子供は「夜日本の子供」。「夜小」に通う。「夜小」の給食は午前零時。まっくらな中でワイワイ食べる。

「夜小」や「夜中」の子は夜目がきく。朝日が昇るころに下校するが、部活の練習なんかで遅くなると、いやあ昨日昼カンカンまで練習でき、眩しくて参ったよ、なんて話になる。

「夜日本」から「昼日本」へ引越しをする人もいる。会社なんかは二十四時間営業になってるから、「営業（夜）」から「営業（昼）」に転勤なんかを命じられる。サラリーマンが家に帰って、オレ転勤になっちゃってさ、なんて奥さんに言うと、アナタ、とか言つて奥さんが泣く。役所に届け出て「昼日本」

の家族になって、子供は「昼小」へ。「コウモリ」とか言われていじめられる。家族みんなで時差が出る。いいことナシ。

そう悲劇的でもない「引越し」もある。朝の十時くらいに駅でゲーター吐いてた「夜日本」の酔客を、遅めの出勤途中の「昼日本」のOLが介抱して、その縁で、二人は結婚。「夜の生活に馴染めるかどうか判りませんが」なんて挨拶状を出して、奥さんは「夜日本」の人となる。生活のギャップに驚くことばかりだけれど、二人力を合わせて乗りこえる。うんうん。

ヒット曲なんかは、「夜日本」と「昼日本」で結構違うんだけど、中には「♪夜だー踊ろうー」を「♪昼だー踊ろうー」と歌詞を変えた二つのバージョンで、両社会でのヒットを狙う輩もいる。

「♪朝目を醒ましー」という爽やかな曲が、「♪夜目を醒ましー」となると、どうもドラキュラみたいというか、なんか怖いな、というイメージになって、そういうことは、人々の心になんとなく、「夜日本」怖い」という凶式を抱かせ続けていて、まあ実際結構怖いです。学校のマラソン大会なんか、暗闇の中黙々と走る。遠足も夜。肝だめしは昼。犬なんか出るとビックリする。

と、いうような、くだらないことばかり「夜日本」の人たちが考えていて役に立たないので、「夜日本」

はやっぱり廃止。

そうして戦前まであった「夜日本」は歴史からもきれいさっぱりと抹殺されて、数少なく生き残った「夜日本」の末えたちが、今もこうやってくだらないことを考え続けている訳です。

ああ眠い。今は夜の三時。明日は早起きしよおっと。



### お大事に

「吾が輩は猫である」に、苦沙弥先生というのが出てくる。猫を飼ってる主人である。

そういえば狂言で、「くっさめ、くっさめ」なんてのも有る気がする。

きつと昔からクシャミは、ヒトの日常に、なんだか微妙な立場で存在しつつづけているのでしょう。つまり、大用小用の便ほどには人目をはばからないが、でも鼻ミズよりは、微妙に便行為に近い気もするし、人によつては、かなり予想もしない、アツ、と驚くようなクシャミをしたりする。

ヒクシツ、とかいって、エツ？ そんなに高い音？ と問いたくなるようなクシャミをする人もいるし、ピシュツ、と短く、苦しそうなものも有るし、インツ、と馬みたいになつてる人もいる。

標準はどのくらいの感じなのだろう。ヒクシツ、を聞いて、高いなあ、と思っていると、別の人が、